

教員名	鈴木 耕太郎	所属学科	地域づくり学科
<p>【ゼミでは何を学ぶのか】</p> <p>本ゼミでは、日本国内（できれば群馬県内）の民俗事例について検討します（民俗事例の一例は下記の通り）。具体的には、調査対象となる民俗事例の歴史的な経緯や変遷を追いながら、その民俗事例が人々にどのような影響を与えてきたか、また現在の意義はどこにあるかを考えていくことになります。</p> <p>もちろん、調査対象となる地域や検討すべき民俗事例は、ゼミ生自身が見つけてきてもらうことになります。</p> <p><u>学問領域でいえば、いわゆる民俗学のゼミということになります。ただし、「民俗学」という学問領域にガチガチに縛られるようなゼミではありません。たとえば神話や昔話、伝説の研究などは神話学や国文学（日本文学）の研究を踏まえることになり、地名の研究であれば地理学的な領域も横断することになります。当然、地域の歴史を検討するなら歴史学の知識も取り入れねばなりません。このようにあらゆるジャンルに広がりを持てるようなゼミにしたいと考えています。</u></p> <p>〈民俗事例の一例〉 生活様式・習慣／習俗・産業・道具・文化・祭礼／催し・信仰／宗教・妖怪／怪異譚の伝承・神話・伝説・昔話・噂話・民俗芸能・遊び／玩具・言い伝え・禁忌・地名など）</p>			
<p>【どのように学ぶのか】</p> <p>まずは、いきなり研究テーマに取り組むのではなく、自分に取り組むべき方向性や研究上の方法論をある程度は知っておく必要があります。そのためには、先行研究をそれなりにおさえておかねばなりません。</p> <p><u>【2年生の後期+3年生の前期】</u>では、複数の論文や本の輪読とそれにかかわる議論を行います。一見すると大変地味な作業ですが、<u>先行研究を抑えずして独創的な研究は生まれません。</u>また、先行研究を重視しなければいくら新しいことを言おうとしても単なる飛躍になってしまいます。基礎を固める時期なので、腰を据えて先行研究に向き合ってもらいたいと思います。</p> <p><u>【3年生の後期】</u>からは、卒業論文に向けて具体的に扱いたい研究テーマを定めてもらいます。その上で、自分が明らかにしたいことは何で、そのためにはどんなことが必要なのか、先行研究はどのようなものがあるのかを把握する必要があります。ゼミでは、そのような卒業論文に向けた基礎的な部分について報告してもらい、議論を交わし合います。<u>実は報告そのものよりも、それを受けた議論の方が重要で、議論で出たことを自分の研究にフィードバックしてもらえればと考えています。</u></p> <p><u>【4年生】</u>からは、毎回、卒論の経過発表です。まずは卒論全体の見通しを発表してもらい、次に各章の発表を行ってもらいます。卒論までに最低3回は報告してもらいたいと思います。</p> <p>なお、ゼミの一環として定期的に巡見型のフィールドワークを催します。また、学年を越えて交流できるような場も設定できればと考えています。</p>			

【学んだことはどのように生かせるのか】

民俗学を専門にしても、資格が取れるわけでもありませんし、就職に特に有利になるということもありません。ただ、何気ない日常や風景のなかに「あれ？」とか「おや？」とか思うようなことを見つけ出す能力は養われるかもしれません。あえていえば「発見力」とでもいえるでしょうか？ そうした能力は将来、何らかのかたちで「地域」に携わる場合に発揮されます。また自文化理解を通して、まだ見ぬ他文化も興味・関心を持ち、尊重できるようになってほしいと考えています。

【おすすめの入門書・基本テキスト】

- ・菅原和孝 編『フィールドワークへの挑戦——〈実践〉人類学入門』（世界思想社、2006年）
- ・宮本常一・安溪遊地 編『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』（みずのわ出版、2008年）
- ・八木透 編『新・民俗学を学ぶ——現代を知るため』（昭和堂、2013年）
- ・福田アジオ 編『知って役立つ民俗学——現代社会への40の扉』（ミネルヴァ書房、2015年）
- ・斎藤英喜 編『神話・伝承学への招待』（思文閣出版、2015年）

【まだ見ぬ君へのメッセージ】

本当に身近なものは、案外に見えていないものです。「灯台下暗し」という言葉がありますが、民俗——より簡単にいえば、世代を超えて受け継がれて来た文化や生活スタイルそのもの——をまずは私たちの生活から見つけていきましょう。それが新たな発想となり、自身の成長へとつながっていくと思います。